

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00821

研究課題名(和文) 大学外国語教育プログラム内評価に適合したスペイン語スピーキング能力測定手法の開発

研究課題名(英文) Development of Spanish Language Speaking Abilities Assessment Techniques Fit for a College-Level Language Education Program in Japan

研究代表者

志柿 光浩 (SHIGAKI, Mitsuhiro)

東北大学・国際文化研究科・名誉教授

研究者番号：60215960

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：大学の一般教育プログラムの一環として提供されるスペイン語教育カリキュラム内でのスペイン語による「口頭でのやりとり」と「口頭での産出」の評価において有効性、信頼性、良好な波及効果を担保しつつ、実施可能性を確保する具体的手法の開発を試みた。助成金により各授業毎に2名の母語話者授業補助者が配置され、口頭コミュニケーション能力の指導・評価に参加した。複数の母語話者授業補助者の配置が評価の信頼性を高める有効な手段となることが示された。かかる評価態勢の実現には学内外からの予算措置が不可欠である。外国語教育のための財政支援を強化することが、日本の大学における重要な課題の一つであることが改めて確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大学一般教育プログラムの一環として提供される外国語教育カリキュラム内での、目標言語による「口頭でのやりとり」と「口頭での産出」に関する評価の重要性は言をまたない。本研究は複数の目標言語母国語話者授業補助者による様々なパフォーマンス評価の実施が、評価の妥当性と有益な波及効果の確保に大きく貢献することを確認した。目標言語の母語話者教師の担当する授業でも、複数の評価者を確保することが不可欠である。しかし、このような指導・評価態勢を実現するためには、学内外からの資金提供が不可欠である。その意味で外国語教育のための財政支援を強化することが、日本の大学における重要な課題の一つであることが改めて確認された。

研究成果の概要(英文)：The study aimed to develop specific methods to ensure the feasibility as well as the validity, reliability, and beneficial backwash of evaluating "oral interaction" and "oral production" in Spanish within the Spanish language curriculum provided as part of the university's general education program. Funded by grants, two native-speaking teaching assistants were assigned to each class to participate in the instruction and evaluation of oral communication skills. It was demonstrated that the deployment of multiple native-speaking teaching assistants is an effective means to enhance the reliability of the assessments. Implementing such an evaluation system requires financial support from both internal and external sources. Strengthening financial support for foreign language education has been reaffirmed as a critical issue for Japanese universities.

研究分野：言語教育

キーワード：言語教育 実施可能性 教育への投資 スペイン語教育 母語話者授業補助者 口頭コミュニケーション パフォーマンス評価 評者間信頼性 テストの

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した背景には、日本の大学における外国語教育環境にパフォーマンス評価を導入するには、実行可能性の点で様々な障害が伴うという現実があった。体操競技やフィギュア・スケートなどと同様、言語教育カリキュラムにおけるパフォーマンス評価においても、複数の評者を確保することが望ましい。しかし、研究活動に忙しい院生ティーチング・アシスタントやそれぞれの事情で忙しい学外からの授業補助者を集めて評価方法の擦り合わせをすることは現実には非常に難しい。また、評価のための詳細なルーブリックを用意しても、授業内の短時間で利用するのは現実的ではない。また、授業終了期日から成績報告締め切りの期日までが短く、パフォーマンス課題の評価を短期間に済ませることは、評価者には大きな負担である。そのような条件下で、評価者の事前訓練を簡略化し、評価に必要な最低限の信頼性を確保することはどこまで可能かという点が、今回の実践研究における重要な検証課題であった。言い換えるならば、教育活動の負担が過重にならない設定で行うパフォーマンス評価で、一定の信頼性を確保することはできるか、実践の中で明らかにしようとしたわけである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、大学一般教育課程の一環として実施されているスペイン語教育カリキュラムにおいて口頭でのやりとり及び口頭での産出の領域における運用能力評価を実施していくにあたって、妥当性(validity)・信頼性(reliability)・有益な波及効果 (beneficial backwash)を確保しつつ、現場の厳しい教育環境の中でも、恒常的にそのような評価が可能となるレベルの実行可能性(feasibility)を実現するには、どのような設定が必要かを明らかにすることであった。

## 3. 研究の方法

2018年度から2021年度まで、日本の一大学の一般教育課程スペイン語科目の授業において本補助金を用いて複数のスペイン語母語話者授業補助者を採用し、大学のティーチング・アシスタント制度を併用しつつ、授業ごとに2名の授業補助者を配置し、口頭コミュニケーション能力の指導と評価に参加してもらった。

スペイン語母語話者授業補助者が参加した評価活動は以下のとおり。

- ・授業内でのやりとり活動でのスペイン語運用能力の観察結果  
毎回の授業で数分間の個別あるいは小グループでの授業補助者とのやりとり練習を行い、各学生のパフォーマンスについて直後に逐次評価する。形成的評価にあたる。
- ・学期途中および学期末のスペイン語でのやりとりテストの評価  
それまでの授業内でのやりとり活動を踏まえた総括的なやりとりテストを、個別あるいは小グループで行い、各学生のパフォーマンスについて直後に逐次評価する。到達度評価にあたる。
- ・学期途中および学期末のスペイン語プレゼンテーション・ビデオの評価  
課題に沿った内容のスペイン語によるプレゼンテーションを各自教室外で録画し提出させ、それを評価する。到達度評価にあたる。

このようにして得られた評価結果のうち複数の評者による評価結果の一部について評者間信頼性検定を行った。評価結果を順位データに変換し、スピアマンの順位相関係数 (Spearman's rank correlation coefficient) を算出した。なお、学習環境を構成する様々な要素を、経年的に厳格に制御することはしていない。

本研究で行った実践のうち、表1に示したクラスで得たデータを分析対象とした。授業は各年度、前期・後期の2期に分けて実施された。受講者は前期・後期を通して同じクラスで受講する規則になっていた。1学期は15週間、1回90分の授業が各週2回実施された。各年度の対象クラスの受講者数は表2のとおり。後期に進めない学生がいるため、前期と後期では人数が異なる。なお2020年度は、covid-19のため年度を通して全ての授業がオンライン形式となった。各セッション二人の授業補助者もオンラインで授業に参加した。2021年度は教室での対面授業となったが、間隔を開けて着席したりするなど、covid-19以前に行っていた授業形態とは異なる状況が続いた

## 4. 研究成果

(1) 2018年度最終口頭試験 (2019年1月実施)

表1

	前期	後期
2018年度	Aクラス 24名, Bクラス 27名	Aクラス 24名, Bクラス 27名
2019年度	Aクラス 32名, Bクラス 28名	Aクラス 32名, Bクラス 27名
2020年度	Aクラス 31名, Bクラス 27名	Aクラス 30名, Bクラス 26名
2021年度	Aクラス 33名, Bクラス 26名	Aクラス 32名, Bクラス 25名

最終口頭試験は、母語話者授業補助者と1対1でスペイン語でやりとりする形態で行った。一人の授業補助者とのやりとりは2～3分間で、それまでに授業内で行ってきたやりとり練習の内容をカバーする質問が授業補助者からなされ、これに応答していく形をとった。

評価にあたっては、時間的制約を考慮して詳細なルーブリックを用意することはせず、1) 正確さ、2) 流暢さ、3) 創造性の3項目について5段階評価を求めた。なお3番目の「創造性」という項目は産出活動の評価で用いられる「複雑さ (complexity)」の要素を分かりやすく言い換えようとしたものである。

図1-1と図1-2は、2018年度Aクラスを2グループに分け、それぞれ2名の授業補助者が個別に面接し、その際のやりとりパフォーマンスをその場で採点した結果について示している。図1-3と図1-4は、2018年度Bクラスについての同様の採点結果である。いずれの場合も有意な相関が見られ、図1-2に示したケースでは相関係数 $\rho$ が0.94を超えており、かなり高い相関が見られた。他の3つのケースでは相関係数 $\rho$ は0.6～0.7の範囲で一定の相関が見られる結果となった。この課題では授業補助者の質問を理解して適切に応答することが求められ、授業補助者によってスペイン語発話の速度や発音の仕方に違いがあるなかで、概ね許容範囲の評者間信頼性が得られていたといえる。

#### (2) 2019年度後期スペイン語プレゼンテーション・ビデオ (2020年1月実施)

ここでは2019年度学年末に実施したスペイン語プレゼンテーション・ビデオの評価結果について示す。

図2-1と図2-2は、2019年度A・B2クラスの受講学生が教室外で一定の課題に沿ってスペイン語で語る様子をビデオに収録して提出したものをそれぞれ2名の授業補助者が採点した結果について示している。いずれの場合も相関は有意であり、相関係数 $\rho$ は0.6前後であった。係数値は必ずしも高くないが、散布図から明らかなように満点の評価を得たケースが少なくなく、いわゆる天井効果が生じており、また著しい外れ値も見られないことから、概ね許容可能な評者間信頼性が得られていたと考えられる。

#### (3) 2020年度後期学期末スペイン語プレゼンテーション・ビデオ (2021年1月実施)

2020年度の授業実施は、covid-19感染爆発により極めて困難な状況に置かれた。結果的に年間を通じて全てのクラス・セッションをオンラインで実施した。自宅などからオンラインで参加する受講者を4名内外の小グループに分け、各グループのオンライン・セッションに授業補助者が一定時間ごとに順番に入る形でやりとり練習を行なうなど、口頭コミュニケーション能力の獲得を目指したが、さまざまな制約が生じた。

図3-1と図3-2は、前年度と同様にA・B2クラスの受講学生が教室外で一定の課題に沿ってスペイン語で語る様子をビデオに収録して提出したものを、それぞれ2名の授業補助者が採点した結果について示したものである。授業補助者たちもいろいろなストレス下にあったこと、大きな制約下でやりとり練習時の評価をA+, A, B, Cの4段階評価に簡略化していたことなどから、ビデオの評価も同様の4段階評価で行った。相関係数の算出は、4段階をA+=12点、A=10点、B=8点、C=6点に換算して行った。その結果、相関の有意性は却下された。ただし、散布図からはある程度の相関はあったように窺える。いずれにしてもパフォーマンス評価においては、最低限の条件を確保することが不可欠であることを痛感させらる結果となった。

#### (4) 2021年度後期学期末スペイン語プレゼンテーション・ビデオ (2022年1月実施)

2021年度は、当該授業は教室での対面形式に戻った。ただしcovid-19の影響は続いており、外国語の授業での口頭練習にあたっては、感染が生じないように十分注意するようという指示がなされたりした。紙に印刷した教材や小テストの使用が憚られ、2019年度まで実施していた小テストの比重が相対的に大きな授業形態に戻ることはできず、授業補助者とのグループで

图1-1

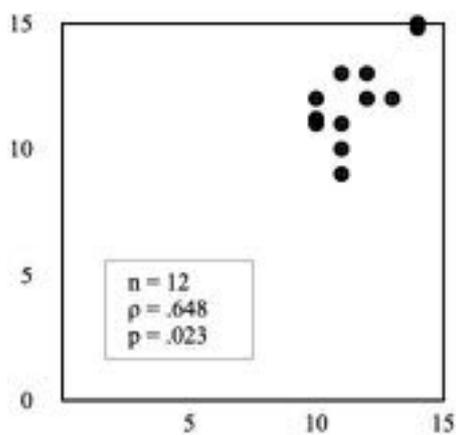


图1-2

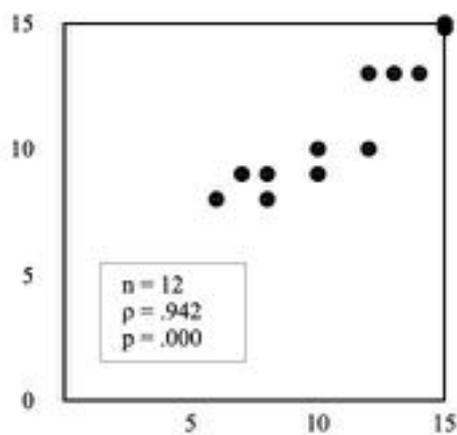


图1-3

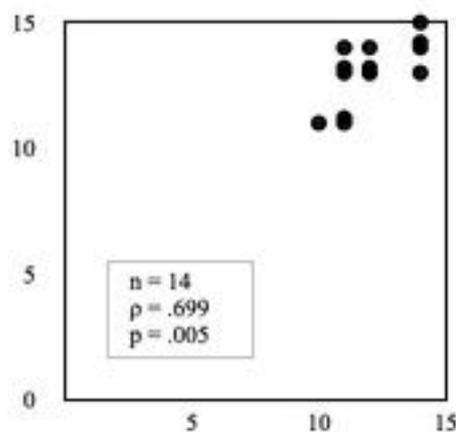


图1-4

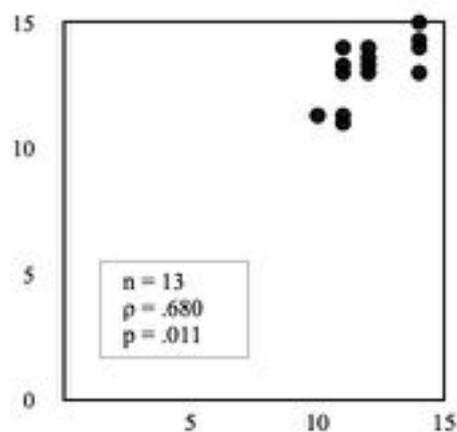


图2-1

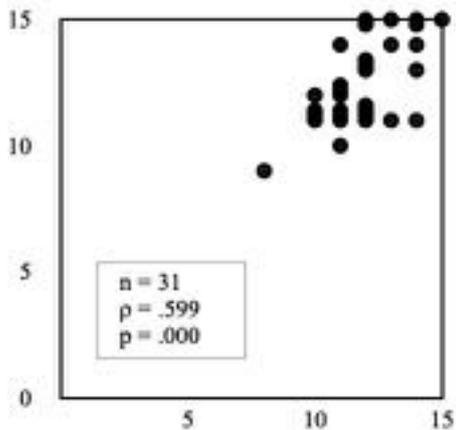


图2-2

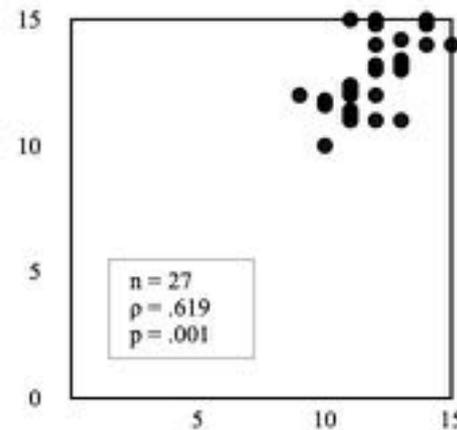


图3-1

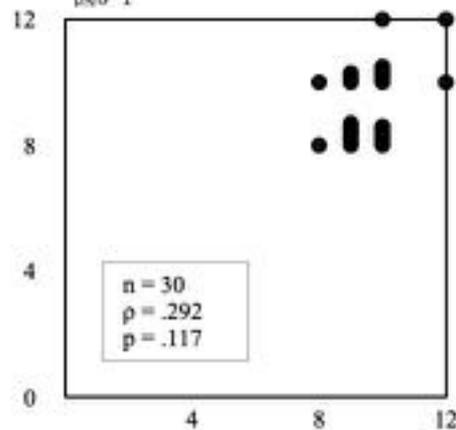
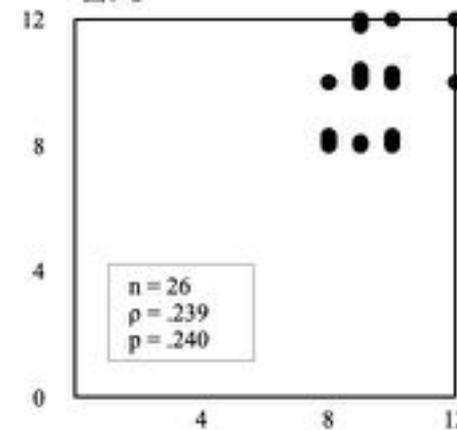
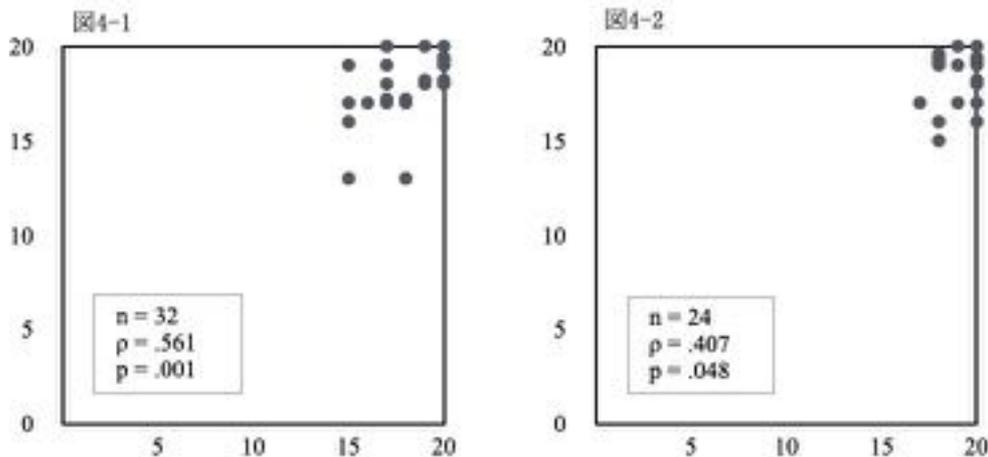


图3-2





のやりとり活動とそれに向けたグループでの準備活動に比重を置いた授業形態が続いた。

図4-1と図4-2は、前年度までと同様にA・B 2クラスの受講学生が教室外で一定の課題に沿ってスペイン語で語る様子をビデオに収録して提出したものを、それぞれ2名の授業補助者が採点した結果について示したものである。なお当該年度は以前用いていた 1) 正確さ、2) 流暢さ、3) 創造性の3項目に加え、4) 全体的な印象、という評価項目を設定した。各項目5段階評価、全体で最大20点という設定である。相関係数を算出した結果、いずれのクラスでも有意な相関が確認され、Aクラスの場合での相関係数 $\rho$ は0.56、Bクラスの場合での相関係数 $\rho$ は0.41となった。いずれも2018年度、2019年度に比べて相関の度合いが弱くなっており、信頼性が相対的に低く算出される結果になってしまった。評価基準に関する意思疎通が十分でなかったこと、新たに加えた評価項目が具体性に欠け、却って天井効果を高めたり主観的判断の介入を強めることに繋がった可能性があること、などが原因として考えられる。

## 5. まとめ

口頭コミュニケーション能力についてのパフォーマンス評価は、テストの設計と実施に関して考慮すべき要素、すなわち妥当性 (validity)・信頼性 (reliability)・有益な波及効果 (beneficial backwash)・実行可能性 (feasibility)のうち、「妥当性」と「有益な波及効果」についてはかなりの程度確保することが可能である。本稿で報告した事例についても、エビデンスを提示することは難しいが、学習プログラムが掲げる口頭コミュニケーション能力の獲得という重要な目標に沿った評価が実施されたことで、受講者の多くがそのような目標と評価形式に合わせた学習活動を行ったと思われる。

他方、「信頼性」と「実行可能性」の間には相反関係が生じやすい。covid-19の感染拡大という外的要因の結果とはいえ、評価の実施にあたって最低限必要な態勢を整えなかった場合には、信頼性の確保が難しくなる。一方で、さほど厳密な評者間信頼性確保の手段を講じなくとも、一定の信頼性の実現は可能である。本研究実施期間中も評者間で事前に同じ評価対象について評価し、その結果をすり合わせるといったことを授業開始前の短時間に行ったりした。そのようなことの繰り返しを行っていくことが重要であるが、現実にはさまざまな時間的制約があり、実現が容易ではないことも多い。

本研究で検証した事例では、パフォーマンス評価の信頼性係数値が必ずしも高くない場合もあった。筆者らの実施した授業では、評価には常に誤差が伴うものであることを考慮して、従来から評価の方法をできるだけ多様化し、一つの評価方法の結果の誤差が全体的な評点に大きく影響しないようにしていたが、そのような配慮も重要である。

他方、評者間信頼性を確保するに一定の工夫が必要であるということは、一人の評価者のみによるパフォーマンス評価をそのまま使うことの危うさを示している。教師が目標言語の母語話者である場合にも、別に評者を確保することが求められる。

本研究の事例のように2名の母語話者授業補助者を各回の授業に配置することそのものが、不可能だという状況が日本の大学においては一般的かも知れない。筆者らの場合は、従前から学内の特別予算を確保したり、今回のように科学研究費補助金の配分を得るなどして実行可能となった。評価活動も含めた外国語教育の教育経費について、学内学外各レベルでの理解を挙げ、必要な資金を確保していくことは、日本の大学における外国語教育の課題である。スポーツやパフォーマンス芸術と同様、外国語教育でもコーチング・スタッフの確保が不可欠である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 志柿光浩, 三宅禎子	4. 巻 18
2. 論文標題 大学スペイン語教育での口頭コミュニケーション能力評価における評者間信頼性について	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 リベラル・アーツ (岩手県立大学 高等教育推進センター)	6. 最初と最後の頁 49-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 志柿光浩	4. 巻 2021年度
2. 論文標題 大学外国語教師の条件	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東北大学教養教育院年報 (2021年度)	6. 最初と最後の頁 62-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 志柿光浩	4. 巻 2020年度
2. 論文標題 母語話者とのやりとりはオンライン授業でも続いた - COVID-19 影響下での実践が示す外国語教育の方向性 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東北大学教養教育院年報 (2020年度)	6. 最初と最後の頁 90-100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 志柿光浩	4. 巻 12
2. 論文標題 私のスペイン語教育	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東北大学教養教育院年報 (2019年度)	6. 最初と最後の頁 86-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 志柿光浩	4. 巻 平成30年度
2. 論文標題 言語教育改革とCEFR	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東北大学教養教育院年報(平成 30 年度)	6. 最初と最後の頁 105-113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

#### 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	三宅 禎子  (MIYAKE Yoshiko)  (30305271)	岩手県立大学・公私立大学の部局等・教授    (21201)	

#### 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

#### 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------